

「リエゾンシニア」が、新たな価値創造で、伝統技術と消費者との間を繋ぐ①

■ 今、「リエゾンシニア」に視線が注がれている

リエゾンとは「繋がり・連携・橋渡し」を意味するフランス語である。

とかく「働かないオジサン社員」と揶揄されがちなシニア人材であるが、定年後研究所では、豊かな人生経験・職業体験で培われた人間力や洞察力、高い専門性や学習意欲を武器に、「本来なら分離しがちなファクター（要素）を繋ぎ合わせる」ことで大きな役割を果たしている「リエゾンシニア」を目撃してきた。

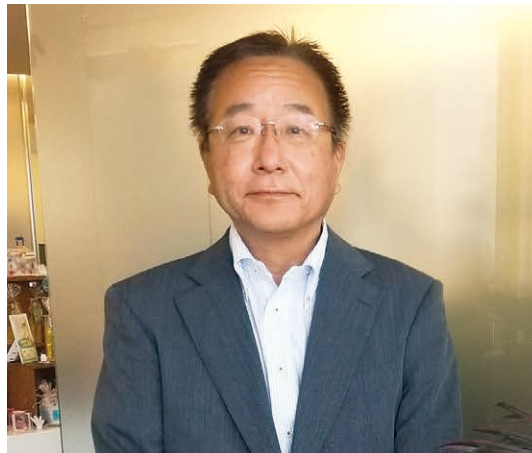
先月号に続き、リエゾンシニアが、地方の中小企業の発展に貢献している事例を紹介したい。

■ 自らを「技術の翻訳者」と称する稲村さん

「リエゾンシニア」の一人である稲村浩二さんは、大手消費財メーカーに新卒入社後、市場調査・ブランディング・営業企画、そして新規事業（食品分野への進出）の立ち上げを担当、社内の「研究・開発」と「マーケティング」を繋ぐ役割を担う、自称「技術と消費者ニーズの間に立つ翻訳者」であった。

更に、複数社で同様の職務を経験後、2年前に東京で独立開業し、今年還暦を迎えた稲村さんは言う。「中小企業の社長の

中には、研究開発に熱心な反面、自社の技術や商品の価値を、「技術には素人である消費者」に伝えることが苦手な人も多い。また、多忙な社長自ら時間をかけて消費者視点を十分に理解し、製品の良さを適切に伝える戦略を考えることは容易ではないため、結果として優れた技術が埋もれてしまうこともある」。



稲村浩二さん

■ 新しい養蚕業の創出で地域共創に燃える愛媛の河合社長

大手総合商社を辞め、「地域に眠る資源の価値を高め、次世代に繋いでいきたい」との志を胸に、5年前に愛媛県松山市で地域共創を目的にしたユニテッドシルク株

式会社を設立したのが河合崇社長（たかし）である。2016年に産学官協業の「愛媛シルクプロジェクト」を立ち上げ、愛媛県の伝統的な資源であるシルクに注目し、繊維素材としてではなく、美容や健康への高い機能性を活かし、大学研究室の協力を得て、商品化に取り組んでいた。

そんな愛媛の河合社長と、東京のリエゾンシニアの稲村さんを繋いだものは何か。なぜ、二人は結び合ったのか。次号で紹介したい。

池口武志（いけぐち・たけし）

一般社団法人定年後研究所理事長
1963年生まれ。1986年日本生命保険相互会社入社。現在、株式会社星和ビジネスリンク取締役常務執行役員、キャリアコンサルタント（国家資格）としても活動中。



一般社団法人定年後研究所

人生100年時代の中で、中高年社員のセカンドキャリアの充実に向けた調査活動を展開中。定年前後からの自走人生にチャレンジする会社員と、それをサポートする企業を応援。当記事へのご意見ご感想を、ポータルサイト <https://www.teinengo-lab.or.jp>「お問い合わせ」にお寄せください。

当ページのバックナンバーをご覧になりたい方は、上記サイトをご覧ください。